

私は「10か月からの教育」ということを、実は10年以上前から保育園で集団的にやっています。これを実施している保育園が全国にいくつかあるのですが、先生たちが決まって驚くのは、どうしてこんな幼児にというより、むしろまだ赤ちゃんに近いような子どもが、漢字に興味を持つのだらうということなのです。

でも、それは簡単なことなのです。いわば本能的なことです。たとえば赤ちゃんがお母さんのオッパイを吸うのは生きていくために不可欠ですから、初めからその能力が与えられています。実は、オッパイを吸うというのはなかなか困難で、おそらく大人には赤ちゃんほど上手にはできないでしょう。オッパイが張ってひとりで出てくる状態以外では、いくら赤ちゃんのように吸っても出てこないのです。

つまり赤ちゃんには生きるために必要な能力は本能的に備わっていることとなります。私は漢字に興味を持つというのは頭の栄養だと思っていますから、自然と心ひかれるように子どもはつくられていると考えています。そう説明せざるを得ないのです。

考えてもみてください、赤ちゃんは何もできません。手足をバタバタさせるだけで、自分の体さえも満足に動かさないのに、オッパイを吸うというむずかしい行動はこなしているわけです。そして三、四歳になると言葉を覚えます。一歳過ぎた頃にはまだ「ウンマ」「マンマ」ぐらいしか

言えなかった子どもが、この時期には日常的な会話はわかるようになります。ほとんどの日本語を理解して、自分が生きていくために必要な言葉がしゃべれるようになるわけです。

幼児の言葉を聴く能力やしゃべる能力には、目を見張るものがあります。大人になってからフランス語やドイツ語ができるかという、三年ぐらいで日常会話をマスターすることはかなり至難の技でしょう。つまり必要不可欠な能力というのは、初めから用意されているのです。ただし使わないと発達しません。使わないでいると絶ち切れになってしまいます。

人間は生まれたときからこの能力を備えているわけですから、まだ一歳にもならない、わずか10か月の子どもでも早すぎることはないのです。「耳」でも「目」でも、口に出しては言えませんが、漢字を見せてやれば覚えるのです。つまり言葉がしゃべれないうちからでも、識別することができるのです。ゼロ歳児が持つ能力には、一種天才的なものがあります。

ポイント:小学生に算数の試験をしてみると、計算問題はだいたいできます。でも頭のいい子どもでも、文章題が解けないのです。要するに文章を読んで式が立てられないのです。それは問題がかなで書かれているから意味がくみ取れないのです。